

越州窯青磁：キカイガシマ・「源氏物語」・唐物

著者	福 寛美
出版者	法政大学沖縄文化研究所
雑誌名	沖縄文化研究
巻	42
ページ	209-231
発行年	2015-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10114/9956

越州窯青磁

——キカイガシマ・『源氏物語』・唐物——

福 寛美

はじめに

鹿兒島県大島郡喜界町大字小野津の八幡神社の境内の草叢に、かつて五つの甕が並置されていた。五つの甕は豊凶を占う資料として野晒しにされていたが、二つが盗難にあい、現存するのは三つである。この三つは中国浙江省北部の越州窯の青磁刻花文水注（一二世紀前半）、中国産の褐釉双耳注口付壺（一一～一二世紀前半代）、須恵器双耳長胴瓶（一一世紀後半～一二世紀）である（亀井、二〇〇六）。

このうち筆者が注目するのは、越州窯の青磁刻花文水注である。青磁刻花文水注を鑑定した亀井明徳は、類品が博多遺跡群出土の二例であることを指摘する（亀井、二〇〇六、八八）。この越州窯青磁は宋時代の高級な交易品であり、『源氏物語』にも秘色青磁として登場する。

また、『源氏物語』の作者、紫式部と同時代を生きた御堂関白、こと藤原道長が藤原氏一門の菩提寺として建立した浄妙寺のあった宇治市木幡御藏山の西南麓から五代から宋代（十世紀）の越州窯青磁の水注が出土している。この

水注は藤原氏一門の誰かの遺愛の品、あるいは副葬品であったかとみられている、という（京都国立博物館ホームページ、<http://www.kyohaku.go.jp/syuzou/meihin/touji/item06.html>）。

そのような高級品がなぜ喜界島に存在したのかは、喜界島の城久遺跡群のあり方をみていくと納得できる。高梨修は城久遺跡群の帰属年代が、現在、①Ⅰ期（八世紀後半～一世紀前半）、②Ⅱ期（一二世紀後半～一二世紀）。③Ⅲ期（一二世紀後半～一五世紀）に整理されている、と述べる。そしてⅠ期は大宰府的土器群（土師器甕・土師器皿）が城久遺跡群に限られた点的状態で少数出土すること、Ⅱ期は城久遺跡群の最盛期であり、遺跡の規模が拡大し、土師器・焼塩土器・須恵器・滑石製石鍋・灰釉陶器等の国産容器群、白磁・越州窯青磁・高麗青磁・高麗無釉陶器等の舶載容器群等がⅠ期の搬入遺物群を著しく凌駕した状態で出土するようになり、在地容器群として類須恵器・滑石混入土器も加わる、と述べる。

高梨はⅡ期における出土遺物は、①国産容器類の大量出土、②滑石製石鍋の大量出土、③高級舶載容器類の大量出土に特徴づけられ、類須恵器以外はほとんど搬入遺物で占められている、と述べる。そして搬入遺物の中には官衙等に特徴的に認められるものが複数含まれること、搬入遺物が中心となる「非在地の様相」こそが、城久遺跡群を最も特徴づけるものであり、在地の人びとにより営まれた遺跡とは考え難い根拠となるものである、と述べる（高梨、二〇一四、七四）。

このように城久遺跡群のⅡ期の遺跡からは、越州窯青磁が確かに出土する。越州窯青磁が喜界島に搬入された後、どのような経緯をたどって小野津八幡神社の草叢に置かれるに至ったかは不明である。

喜界島の城久遺跡群は謎が多い。その理由の一つが、文献資料に残るキカイガシマの様相が現実の城久遺跡群を擁する喜界島と著しく乖離しているからである。つまり、本土側の文献資料には城久遺跡群の存在を確認できるようなものは存在しない。それは城久遺跡群について、公的、私的を問わず、その存在や機能を書き留める必要性を、同時

代の人々が持っていなかったからに他ならない。

また、平安時代中期に成立した『源氏物語』には上流貴族が舶載の文物、いわゆる唐物を愛好していた様子が描写される。その有様は、当時の実在の上流貴族の生活を彩った唐物のあり方を映している、とされる。そして、唐物をどのような手段で同時代の都の貴族達が入手したかは、文献資料である程度まで辿ることができる。

しかし、唐物溢れる『源氏物語』の世界の登場人物達がどのような手段で唐物を手に入れたかは、物語に書かれることはない。言うまでもなく『源氏物語』は文学作品であり、農業についての言及がないことはよく知られている。それと同様に唐物の入手経路にも言及する必要がなかったからであろう。

小論では越州窯青磁をキーワードに、キカイガシマと『源氏物語』の文章化されない世界と唐物について考察を試みる。

ウキシマ・ヤキシマ

『おもしろさうし』全二十二巻の最終編纂は一六二三年とされる。それに先立つ一五三一年、巻一のみが成立した。原おもしろさうしと言うべき『おもしろさうし』巻一のおもしろの中には「き、やの浮島^{うきしま}」、「き、やの焼島^{やけしま}」という詞句がある。この六の詞句は他からの混入とされるが、原おもしろさうしにこの二つの語が登場するのは興味深い。おもしろは次のようになっている。おもしろ引用は外間守善校注『おもしろさうし』による。「き、や」の部分は平かなに改めた。／は改行箇所である（外間、二〇〇〇）。

卷一—六

一聞得大君ぎや／神座吉日 取りよわちへ／按司襲いす／十百末 ちよわれ

又鳴響む精高子が／又てるかはと 行き合て／又てるしのと 行き合て

又首里杜ぐすく／降れて 降れ榮よわ／又真玉杜ぐすく

又き、やの浮島／き、やの焼島

又首里杜ぐすく／世掛けにせ按司襲い／又真玉杜ぐすく／襲いにせ按司襲い

又聞を按司襲いや／神座ぎやめ 鳴響で

又鳴響む按司襲いや／おぼつぎやめ 鳴響で

（大意 聞得大君、鳴り轟く霊能高いお方が天上他界、かぐら祭祀の日を選び、太陽神てるかは・てるしのと行き合つて首里城に降臨し、降臨して榮え給え、「き、やの浮島、き、やの焼島」、首里城にまします世を支配する国王様、名高く鳴り轟く国王様はかぐら、おぼつまで鳴り轟き、国王様こそ永遠にまします）

このおもろは琉球王国第二尚王統の最高神女聞得大君の祭祀行為を謡っている。謡われていない部分をおもろの文脈から補うと、まず祭祀の為の吉日の選択がなされ、次に聞得大君は天上他界に赴いて太陽神と行き合い、霊力を更新した上で宗教的な首里城（首里杜・真玉杜）に人間の繁栄のために降臨する。そしてさかんな祭祀を行い国王に太陽神の霊力を捧げ、首里城の国王の支配力（世掛ける力、襲う力）が高まり、国王はかぐら・おぼつ（天上他界）に鳴り轟く。それは国王が聞得大君の祭祀行為を媒介に天上他界の太陽神の霊力を身につけたことを意味する。それにより、国王は永遠にましますのである。

このおもしろ「き、やの浮島、き、やの焼島」はおもしろの文面からみて異質である。「又首里杜ぐすく／降れて
降れ栄よわ／又真玉杜ぐすく」の後続で「首里杜ぐすく」と「真玉杜ぐすく」ではじまる詞句の対を形成するなら
ば、「降れて 降れ直しよわ（降りて世を平和に豊かにする祭祀、直を行って）」などがくるのが最も妥当であろう。
浜田泰子の『おもしろさうし対語索引』に「降れふさ（栄）て」の対語として「降れ直ちへ」が十例挙がっている（浜
田、一九八八、四三三）ことからの類推である。

おもしろには時々、このような混入が見られる。混入の理由は不明である。一六二三年に最終編纂された『おもしろさ
うし』の巻十一・五五四、そして重複おもしろの巻十三・八六八には「喜界の浮島」、「喜界の盛い島」の用例がある。こ
の二点のおもしろは喜界島から西の奄美大島北部、南部、そして島伝いで南下し、沖縄島の北端から島を南下して那覇
港に至る、という航路を謡っている。また、他のおもしろでは那覇泊（港）を浮島と表現する場合もある。五五四につ
いて、かつて拙著で「喜界の浮島从那覇泊こと浮島への航海おもしろは、奄美群島が琉球王国の版図に入り、島を南
下する航路が安定的に確保された時期の束の間の情景を伝えます。一四六六年の尚徳王の喜界島征討後、一六〇九年
の島津の琉球侵攻までの時期です」と述べたことがある（福、二〇〇八、八三）。なお島村幸一は「喜界のもししま」
を「萌い島」ととらえ、「植物が生い茂っている島の意」とする（島村、二〇一四、九六）。このモイシマは、海岸段
丘の地形が印象的で、現代も隆起を続ける喜界島のあり方を表現した語、とも考えられる。

おもしろには他に、勝連から船を出し、「喜界^{きや} 大みや 直地^{ひちぢ} 成ち^なへ みおやせ（喜界島・奄美大島を地続きにし
て奉れ）」と謡う巻十三・九三九の用例もある。勝連を拠点にしていた勢力が北の奄美群島の島々への征服欲を謡っ
た、と考えられるが、確かなことはわからない。

六に混入した「き、やの浮島、き、やの焼島」のうち「き、やの浮島」について、喜界島に城久遺跡群や高級舶載
品の考古遺物があることを以って、かつて拙著において「琉球王国成立以前、南島交易の拠点だった喜界島にはヤマ

トはもとより、東アジア地域の人々が富の情報を携え、訪れてきた、と考えられます。そのような前代の繁栄した喜界島は琉球王国の交易の拠点、那覇港にとつても理想の姿だったはずです」と述べたことがある（福、二〇〇八、八三）。なお島村幸一は琉歌の「浮島」の用例に「田名の浮島」があり、必ずしも那覇だけではなく、浮いているような島、目立つように浮き上がっている島の意、と「浮島」を読み解いている（島村、二〇一四、九六）。島村の指摘は重要だが、おもしろ世界の中での浮島が那覇港と喜界島を指していることは興味深い。

それでは「き、やの焼島」はキカイジマの何を表現しているのか。ヤキシマはおもろでは他に用例は無い。そして『沖縄古語大辞典』には「やきしま」を「未詳語。「焼き島」か」とし、古謡のウムイの詞句「よろん うきしま／ゐらぶ はへしま／いへや やつちいしま（与論 浮島／永良部 栄え島（延へ島、走り島）／伊平屋 やき島」が用例としてあがっている。伊平屋島には「焼き島」という名称から思い起こさせる火山の島という事実はない。喜界島にも勿論、火山は存在しない。

高梨修は近年、一一世紀から一二世紀の薩南諸島海域について「キカイガシマ海域」の名称が用いられていること、この期間には城久遺跡群Ⅱ期の大半が含まれること、その海域にはキカイガシマの名称を所有する二島、大隅諸島の硫黄島と奄美諸島の喜界島が認められることから、これら二島のキカイガシマに挟まれた薩南諸島の島嶼海域を狭義の「キカイガシマ海域」と理解しておく、と述べる（高梨、二〇一四、七五―六）。

このキカイガシマ海域のキカイガシマの一つ、硫黄島は火山島であり、まさに「焼島」である。そして浮島が喜界島であるなら、巻一―六に混入した「き、やの浮島 き、やの焼島」はおもろの謡われた沖縄島に近い喜界島をウキシマと称し、遠い硫黄島をヤキシマと称した、と考えることもできる。

勿論、それはおもろに混入した一節の深読みに過ぎない。しかし、平安時代中盤から鎌倉時代まで喜界島のウキシマは南西諸島の中で際立った賑わいを見せていた。そして、硫黄島の硫黄は日宋貿易の重要な交易品だった。吉成直

樹は先学に拠って火山の無い宋が火薬原料の硫黄を求め、一〇八四年には大量の日本産硫黄の買付計画の建言があり、それが実行された可能性が高いことを指摘する。吉成はまた、硫黄島の硫黄が日本で最も質が良いことを指摘する（吉成、二〇一一、一四七―一四八）。

そして「宋の「日本」からの硫黄の輸入は十世紀末から始まり、遅くとも宋の大量買付計画が実行された十一世紀後半には本格化していると考えられる。輸出される硫黄の主要産地が硫黄島であったと考えてよいとすれば、その輸出航路は、硫黄島から薩摩半島の西南部を経て九州西岸地域を経由して博多に向かう航路である」と述べる（吉成、二〇一一、一五〇）。硫黄という利権を生み出すヤキシマにおもろ時代の人々も深い関心を持っていたのではないか。ここでは六のおもろの混入箇所「き、やの浮島 き、やの焼島」が喜界島と硫黄島を示す可能性もあることを指摘しておく。

キカイガシマ

キカイガシマは『日本紀略』（九九八年、貴駕島）、『新猿楽記』（一一世紀半ば頃成立、貴賀之島）、『長秋記』（一一二一年、喜界島）、『吾妻鏡』（一一八七年、貴海島・一一八八年、貴賀井島）、『頼朝下文写』（一一九二年、貴賀島）、『宝物集』（一一八九―一二〇〇年頃成立、鬼界が島）、『保元物語』（一二一九―一二三二年頃成立、鬼海島）、『漂到琉球国記』（一二四四年、貴賀島）、『平家物語』・『八幡愚童訓』など（一二三―一四世紀頃、鬼界島）、『中山世鑑』（二六五〇年成立、キカイジマの記事は一四六六年、鬼界島）、『海東諸国紀』（一四七一年、鬼界島）などの文献に現われる（永山、二〇〇八）。

これらの文献でのキカイガシマの描写については、永山修一の数々の論（永山二〇〇七、二〇〇八、他）に詳しい

ので、ここでは繰り返さない。永山は大宰府との関係を窺わせる考古遺物として越州窯青磁があり、喜界島の城久遺跡群では越州窯青磁の精製品・粗製品が確認されていて、官的な施設に保管されていた什器のひとつと考えるのが妥当とされる説があること、他から大宰府が南蛮賊追討の下知をしたのは、現在の喜界島と考えられそうである、と述べる（永山、二〇〇八、一四六）。

また、永山は『吾妻鏡』の源頼朝のキカイガシマ征討をめぐる一連の記事を詳細に分析し、「摂関家の諷諫は、三韓と貴賀島とを同列に論じており、当時の公卿たちもまた貴賀井島を全くの異国として認識していたことを確認できる」と述べる（永山、二〇〇八、一三五）。

この公卿達の認識は公的な見解である。永山も述べるように『新猿樂記』のキカイガシマは夜久貝（ヤコウガイ）・赤木・檳榔などを産出する島々の集合名称であり、そこから運ばれた品々は都の貴族のもとにもたらされた。永山も南西諸島産の品々が『小右記』を記した藤原実資のもとに集まっていたことを指摘している。藤原実資は唐物狂いであり、紫式部の夫、藤原宣孝の甥の太宰大貳藤原惟憲が関白の藤原頼通にばかりに莫大な唐物を融通することに憤り、惟憲を『小右記』で非難している、という（河添、二〇〇七、一〇九～一一一）。

河添は「大宰府の役人から道長やその息子の頼通への献上品は、権力者におもねる下位の者の習いといってしまうがそれまでだが、むしろ摂関家のほうから、自分たちの息のかかった貴族や家司クラスを大宰府の役人に任じて、癒着関係を深めたという経緯もあった。権帥や大貳と摂関家との癒着の構造が、朝廷が先買権をもった対外貿易から大宰府の官人主導の貿易へと拍車をかけたのである」と述べる（河添、二〇〇七、一〇九～一一〇）。

そして実資が博多近くに高田牧という荘園を永祚元（九八九）年から領有し、そこを起点に自宅に多くの唐物を運ばせていたこと、実資の高田牧の牧司だった藤原蔵規が三等官の太宰大監になっており、実資も唐物の献上にあずかっていたこと、蔵規や宗像大宮司の仲介で博多周辺に滞在していた宋の医師から薬を買っていったこと、などを

河添は指摘する。

河添は「宋船が来航した折ばかりでなく、高田牧から恒例の進物が届くというのも、藤原藏規の後任者の牧司、宗像妙忠が博多の商人から買い上げていた可能性もある。かつては高田牧に直接来航する宋船が定期的であり、密貿易が行われていたという説もあったが、最近の歴史学の成果ではむしろ否定されている」と述べる（河添、二〇〇七、一一一）。

この河添の一連の指摘は、平安時代の上流貴族の唐物への強い執着と、唐物を入手する手段が合法、非合法を取り混ぜて様々だったことを示唆する。上流貴族は地方官を「受領風情が」と舐め切った口調で語る場合があるが、その大宰府の受領風情がもたらす唐物は上流貴族の垂涎的だった。その唐物と南西諸島産の貴重な文物の運ばれてくる海路の中の拠点的な島がキカイガシマである。

頼朝のキカイガシマ征討の際、摂関家から「貴賀井島あたりの故実は日本では良くわからないので追討を止めるように」という諷諫があった」と永山は述べる（永山、二〇〇八、一三五）。当時の藤原氏の氏長者で摂政だったのは九条兼実であり、兼実の兄の近衛基実是一時、南九州の日本最大の荘園、島津荘の領主だった。島津荘は万寿三（一〇二六）年、大宰大監平季基が日向国島津院（宮崎県都城市）を中心とする一帯の無主の荒野を開拓し、宇治関白藤原頼通に寄進したのに始まる（『国史大辞典』）。摂関家が薩摩・大隅・日向にまたがる南九州の地域を荘園としていた理由は、田畑などの耕作地からの収益や特産物や織物のほか、南西諸島から南九州に集まる利権を握るためではないか。そしてその中には硫黄島の硫黄の利権も含まれていたのではないか。

島津荘に含まれるのは南九州のほか、薩南の島嶼の多禰島（種子島）、甌島、そして河辺郡などである。鎌倉時代の河辺郡には千竈時家の讓状に出てくる島々が含まれる。永山修一は「国郡制に見ると、薩摩半島の南部から十二島にかけての河辺郡の郡司職は、平姓河辺氏から得宗被官である千竈氏へと変わった」、「十二島地頭職成立の契機と

しては、河辺（平）通綱がキカイガシマ征討の功により河辺郡司に任命されたとする「河辺氏系図」の記載などからいっても、ほぼ首肯できると考える。ただし、十二島だけが、頼朝配下の兵が征討行動を行った対象地域であつたわけではなく、対象地域はさらに南に広がっていたはずであり、広義のキカイガシマの一部に「十二島地頭職」が設定されたものと考えたい」と述べる（永山、二〇〇八、一三九～一四〇）。

十一世紀の開拓以降、肥大化していった島津荘の河辺郡に鎌倉時代、十二島（竹島・硫黄島・黒島・口之永良部島・屋久島・口ノ島・中之島・臥蛇島・平島・諏訪之瀬島・悪石島・宝島）が属していたことは示唆的である。十二島には硫黄という富に直結する交易品を産する硫黄島、天然の良港を有する口之永良部島や屋久島のほか、航海に巧みな海民達がいたことで名高いトカラ列島が含まれる。河辺郡を含む平安時代末期の島津荘にも十二島、そして更に南の奄美群島のキカイガシマの情報が及んでいたのではないか。

平安時代、上流貴族は飽くことなく唐物を集めていた。これは憶測に過ぎないが、平安時代を通して朝廷が管理する貿易に飽き足らず多くの唐物を求めていた撰閥家がキカイガシマの実情を知らない、と述べたのは、平家にかわる新興勢力の源氏の頼朝が南九州と南西諸島の利権に手を出そうとしていることに対する反発の意味もあつたかもしれない。いずれにせよ島と津、こと拠点のシマと島の港湾集落のツ、という名の莊園を南九州に所有し、政治の中枢にあつた撰閥家は公的にはキカイガシマを三韓同様と見なしていたのである。

秘色青磁

『源氏物語』の唐物について詳細に検討した河添房江は、唐物が狭義には中国製品、そして中国からの唐船でもたらされたものだが、広義には中国を中継地としたインド・南海・朝鮮・その他の地域からの渡来品が含まれている、

と述べる（河添、二〇〇七、二一）。そして河添は『源氏物語』の秘色青磁、こと越州窯青磁について言及する。秘色青磁は末摘花巻に登場する。

末摘花は常陸宮の姫だが、父宮亡き後、古風で豊かとはいえない暮らし向きをしている。邸の食器は唐土から招来されたものだが、流行遅れであることを作者は描写する。それは「御台、秘色ひそくやうの唐土のものなれど、人わろきに、何のくさはひもなくあはれげなる、まかでて人々食ふ（お膳ひそくの上の、青磁らしい食器は舶来物だが、みつともなく古ばけて、お食事ひそくもこれといった料理もなく貧弱なのを、女房たちが退がってきて食べている）」からわかる（河添、二〇〇七、一五三）。

河添は平安文学のもう一つの秘色の例として、『宇津保物語』の藤原の君巻の前の大宰大弐の滋野真菅をめぐるエピソードをあげる。真菅は大宰大弐に任官し、たつぷり蓄財した。その一家の豪勢な生活ぶりが「ぬしもまるる。台二よろひ、秘色の杯ども。娘ども、朱の台、金の杯とりてまうのぼる（主人の真菅が食事をしている。台盤が二具、そこに秘色青磁の杯なども並んでいる。真菅の娘たちは朱器の台盤をすえて、金の碗で食事をしようとしている）」という文章で表現される（河添、二〇〇七、一五六）。

河添は大中三（八四九）年、博多の鴻臚館に滞在していた唐商人の徐公祐から平安京の東寺の西院に滞在していた義空に、陶磁器としては白茶垵と越垵と青瓶子が贈られたという記事をあげ、この越垵が越州窯青磁である、と述べる。そして「秘色」という言葉の初出は村上天皇の叔父の重明親王の日記『吏部王記』の天曆五（九五二）年六月九日の条に「御膳沈香折敷四枚、瓶用秘色（瓶は秘色を用いる）」とあるのを、一条兼良が著した『花鳥余情』が末摘花巻の注として記しているのが、現存の歴史叙述では最古の例となる、と述べる（河添、二〇〇七、一六二）。

河添は延喜三（九〇三）年に大宰府が出した禁制によれば、唐船が到着した際、「諸院諸宮諸王臣家」、つまり都に住む皇族や貴族層が争って使者を出して「遠物」（交易品として運んできた唐物）を買い漁るので、その値段がつり

上がったということ、その結果、朝廷が先買権を行使して適当な価で貨物を購入できないので、皇族や貴族や社寺の諸使が関を越えて私的に唐物を買うことを禁止していることを挙げる。そして「それは、逆に鴻臚館や博多周辺でいかに私貿易が行われていたかの証左となろう」と述べる（河添、二〇〇七、一六四）。

亀井明德は平安前期から中期にかけての輸入陶磁器のうち青磁は越州窯製品が圧倒的に多い、と指摘する。そして越州窯陶磁器の出土状況を詳細に検討し、「越州窯陶磁器の出土は、寺院、官衙が多く、とくに畿内では寺院からの出土例が圧倒的に多い」こと、九州においては寺院、官衙などの出土例も多いが、それ以外の集落からも出土することを指摘する。そして、河添があげた延喜三年の禁令と仁和元（八八五）年の「大唐商賈人着大宰府、是日、下知府司、禁王臣家使及管内吏民、私以貴直、競買他物」（『日本三代實録』四八）をあげ、九世紀後半に唐物公易使到着以前に実質的に先買権を行使した階層が生じ、その階層は、諸院、諸宮、諸王臣家、大宰府官人および郭内富豪之輩があげられている、と述べる（亀井、一九八六、八七・八九）。

亀井は「仁和元年史料の吏すなわち大宰府官人あるいは管下の国司等が不正貿易によって利を得ていた例は枚挙にいとまがない」、と述べ、前述の『小右記』に記された藤原惟憲の有様をあげる。そして「郭内富豪之輩」について先学に拠りながら考察を加える。亀井は彼らを「唐物の交易活動、国内における唐物流通過程に大きな役割を負っていたのではなからうか」と述べる。また「九世紀後半の大宰府郭内および恐らくその周辺地域を含めた富豪層が利益の多い唐物の商業活動を黙視していたとは考えられない」と述べる。そして、そのような富豪層が九州の越州窯陶磁器の出土する集落の住人だった可能性を示唆する。そして「畿内の殷富・富豪層が官市の交易過程に入りこんだように、大宰府郭内の富豪之輩は唐物先買権を実質的に行使して彼らの商業活動のうちでその占める割合は大きいと考えられる」と述べる（亀井、一九八六、八七・八八）。

また、佐藤和夫は「大宰府管内の国司らが、子弟を率いて調庸租税の妨げをなすことの禁が出されるほど、国司の

職権をかさにきた威力は絶大なものであるから、国衙機能への癒着は誰でも望んだ。在地勢力の土豪層や土着官人たちは、それゆえ国家権力の手先となり忠誠者となる」と述べる（佐藤、一九九五、一六〇）。佐藤の述べる在地勢力の土豪層や土着官人が大宰府郭内の富豪之輩と重なるのは言うまでもない。

これらの河添や亀井、そして佐藤の指摘は、越州窯陶磁器ははじめ唐物が当時の上流貴族にとって垂涎的であったと共に、その交易に関わることで富が蓄積できる、と大宰府周辺の富豪層に見なされていた、ということがわかる。また私貿易が行なわれ、大宰府周辺の富豪層は入手した唐物の国内での物流にも携わっていたらしいことがわかる。

河添房江は「そもそも平安京という都市に富が集中すればするほど、唐物といった奢侈品への欲望が日ましに高まることは必然だったのではないでしょう。もちろん朝廷も、貿易統制をかけますが、その禁制の網の目をくぐって、貴族たちの私貿易は盛んにならざるをえません」と述べる（河添、二〇〇八、一九）。潤沢な唐物によって室内が飾られた貴族の邸宅の有様を『源氏物語』は美しく描写する。その唐物の一部は非正規ルートを通じて邸宅に運ばれたのかもしれない。

明石の君

『源氏物語』の明石の君は明石入道の娘であり、光源氏と結ばれて明石の姫君を生む。この姫は後に明石の中宮となり、皇子や皇女を生み、皇子が皇位につき国母となる。明石の君と源氏は、源氏が須磨に蟄居していた折に大嵐に遭い、源氏を迎えに來た明石入道が娘と源氏の仲を取り持ったことよって出会う。明石の君は源氏が愛する美貌と才知を兼ね備えた六条御息所を思い起こさせる風情をそなえる。彼女は源氏に愛された後も、受領の娘として自分を律し遜って生きる。そして音楽の素養が深く和歌の才に優れ、高い美意識を持つ秀でた人柄を源氏に愛され続ける。

河添房江は源氏が六条院を造営し、最初に迎える正月の準備に忙しい歳末、源氏が六条院や二条東院に住む女君達にそれぞれ新春に着る晴の装束をプレゼントすることを思いつき、紫の上の立ち会いのもと、女君にふさわしい装束を選んでいく玉鬘巻の場面に注目する。河添は明石の君に「梅の折枝、蝶、鳥飛びちがひ、唐めいたる白き小桂」という唐風の綾が選ばれたことを指摘し、「明石の君に唐物や唐めいたものがまとわりつくのは、明石の入道が、明石という大宰府と都の中継地である地の利と財力を活かして、唐物を蓄えていたからだと考えています」と述べる（河添、二〇〇八、一七七―一八〇）。

六条院の新たな年の始まる初音巻で、源氏は女君達の部屋を訪れる。最後に訪れたのは明石の君の部屋だった。そこで源氏は次のような情景を目にする。ここでは河添の訳文をあげる（河添、二〇〇八、一八二―一八三）。

光源氏は、暮れ方になる頃に、明石の御方にお越しになる。近くの渡殿の戸を押し開けた途端に、御簾のなかから流れてくる風が、優美に吹きただよって、他に比較して格段に気高く感じられる。本人は見えない。どこかしらとご覧になると、硯のまわりが散らかっていて、冊子類などが取り散らかしてあるのを手に取り手に取りご覧になる。唐の東京錦のたいそう立派な縁を縫い付けた座布団に、風雅な琴をちよつと置いて、趣向を凝らした風流な火桶に、侍従香をくゆらせて、それぞれの物にたきしめてあるのに、裏被香の香がまじっているのは、たいそう優美である。手習いの反故が無造作に取り散らかしてあるのも、尋常ではなく、教養のある書きぶりである。大仰に草仮名を多く使ってしゃれて書かず、無難にしつとりと書いてある。

河添は明石の君が唐風の衣装を贈られたので、それを着用することや、光源氏が訪れることを意識してあえて唐風のインテリアを整えた、としている。光源氏は唐風のインテリアと贈った衣装を美しく着こなす明石の君に魅せら

れ、元旦の夜を明石の君の部屋で過ごした。河添は「彼女はふだん部屋をこれほどまで唐物や唐風の品々で飾るような、ブランド志向の持ち主ではないかもしれませんが、いざとなれば、これくらいの演出はお手のものだったので」と述べる（河添、二〇〇八、一八四）。

この河添の指摘は明石の君が唐物の扱いに慣れており、威信財でもある唐物をさりげなく使って上品な空間を作り出す能力があることを示す。そして、このような唐物の扱いは一朝一夕にできるものではなく、明石の君が明石にいた少女時代から極上の唐物に囲まれ、それぞれの唐物の特徴を熟知していたことを示唆する。

前述したように河添は「明石の入道が、明石という大宰府と都の中継地である地の利と財力を活かして、唐物を蓄えていたからだと考え」ている。明石の入道の父は大臣であったが、自らは近衛中将の地位を捨て、播磨国守となり土着し、出家した。その理由は娘である明石の君が誕生した時にみた夢にある。

明石の入道の夢は「自分はみずから須弥の山を右手に捧げ持っている。山の左右からは、月の光と日の光が清かにさし出て世の中を照らす。自分自身は山の下の陰に隠れて、光は当たらず、山を広い海の上に浮かべ置くと、小さい舟に乗って、西の方角を指して漕いで行く」というものである。この夢を河東仁は入胎夢とする。河東は「入胎夢とは、聖者や王者ないし英雄の誕生をめぐって、洋の東西を問わず語られてきた霊夢であり、女兒の出生をめぐって語られる場合には、娘が長じて聖者や王者の母となる予兆とされる。具体的には、日月や明星、宝珠や剣などを呑み込む、あるいは懷や袂へ入れるといった様を夢に見たのち懷妊するというパターンのものである」と述べる（河東、二〇一〇、二〇七）。

明石の入道は妻にもその夢のことを語らなかった。河東はその行爲を「重要な夢は実現するまで他人に話してはならぬという、「夢信仰」における約束事の一つに由来すると考えられる」と述べる。そして明石の入道は明石の姫君が東宮の皇子を生んだことを知り、姿を消す。河東は明石の入道が夢を孵化・実現（インキュベーション）するため

になした最大の行為として自らの身を代償として差し出すことをあげる。東宮の皇子が誕生したといっても、東宮が即位し、その皇子が立太子される確証はないので、「自分自身は山の下のに陰に隠れて、光は当たらず」という状況を自分で作りだした、というのである（河東、二〇一〇、二〇六）。

この明石の入道のあり方は、霊夢をみた者がその実現に向けて生き、そして姿を消した、と捉えることができる。その意味で明石の入道の『源氏物語』における生き方は完結している。しかし、明石の海辺に広大な邸宅を構え、娘に高い知性と教養を授け、光源氏を魅了するほどの貴婦人に育て上げた明石の入道の財力はどのように形成されたのだろうか。

明石海峡・播磨灘

明石は交通の要所であり、海の難所、明石海峡に面している。梶川信行は魚住泊（明石市大久保町江井島の江井ヶ島港）が明石海峡の潮待ちの港だったことを指摘する。梶川は「明石海峡は潮の流れが非常に速いので、古代の船がそれに逆らって進むことは、まず無理であったに違いない」と述べ、魚住泊のほか大輪田泊（神戸港）、野島（兵庫県津名郡北淡町野島）も明石海峡の潮待ちの港であったことを述べる（梶川、二〇〇九、二六二）。明石海峡は当時の航海術では容易に通過できない海峡だったのである。

ところで瀬戸内海が平安時代、海賊の横行する海だったことは先学によって指摘されてきた。西別府元日は政府が海賊の跳梁を問題にする時、海賊集団の居住地と考えられる摂津・山城・播磨などの水陸交通の要衝地域を対象とした指令と、この地域を含みながらも他の内海諸国地域に重点をおいた指令とを、意識的に区別していたと考えることができるのではなからうか、と述べる。そして前者の地域に居住ないし群集する集団については、単純な海賊という

認識ではなく、いわゆる群盗行為をなす者も含んでいたと考える事が可能であろう、そしてこれらの地域において海賊行為や群盗行為をなす者のなかには、先学が指摘するように王臣家と密接に関係した交易集団を想定することも可能であろう、と述べる。西別府はまたこのような集団の場合、国司では対応しえない側面があり、検非違使の投入という対策が必要だったと考えられる、と述べる（西別府、一九九五、三八一―三八二）。

西別府はまた、良吏といわれた藤原保則が九世紀に盗賊行為を行使する人々について階層を区別し、「良家の子弟や貴族の従者など編戸の民ではない者たちが賊の渠師となりそれが相互に連携して集団化した場合と、飢寒に逼迫されて盗賊行為を働きながらも必ずしも凶狡の心をいだくにはいたっていない場合との二層に大別されている」と述べる（西別府、一九九五、三八二）。

明石入道は播磨国守だった。彼は勿論、海賊を取り締まる側にいたはずである。しかし、海賊行為を働く者を取り締まる者が一種の狎れ合い関係にあった可能性は十分考えられる。しかも、明石海峡は潮待ちをして慎重を期して渡るべき航海上の難所だった。多数の唐物を積む、まさに平安貴族にとつての宝船であつても同様である。また芸予諸島海域や備讃諸島海域に比べて島影の比較的少ない播磨灘も、瀬戸内海を航海する船にとって難所のひとつであり、海難が頻発したことを、山内譲は指摘する（山内、二〇〇四、六〇）。

明石海峡、そして播磨灘などの航海の難所は船が瀬戸内海を横切る際、必ず通らなければならない航路上に位置していた。そのような海を臨む地の国守は大宰府に赴任した官人には及ばなくとも、相応の利権を持っていたはずである。

横井孝は播磨が『延喜式』のいわゆる大国であり、温暖で肥沃な土地柄であるために、受領層の望む国司のひとつであつたことには間違いない、と述べる。そして紫式部の父の為時が若年時に権少掾だった播磨と、為時が一条天皇に直訴して手に入れた越前の収税物（調）を比較し、播磨の収税物の豊かさを指摘し、「久しく言われているように、

明石入道の富裕を支えているのがこの播磨の豊かさなのである」と述べる（横井、二〇一三、二一〇・二二二）。

この指摘は尤もだが、播磨の豊かさの中には記録に残されることのない状況から発生する富も相当にあったはずである。そして、そのことを紫式部が知っていた可能性がある、と考える。式部は父の為時の越前下向に同道し、越前の国府（武生）で一年半ほどの歳月をすごした。河添は北宋時代（九六〇―一二二七）の百六十年間、日宋の往来は頻繁であり、「宋船が博多からまわって日本海に入り、越前敦賀に入港することも稀ではなかったことや、博多より都に近い敦賀に入港する利便もあって、敦賀には蕃客を応接する松原客館もあった」と述べる（河添、二〇〇七、九九）。このことは、敦賀が大宰府に及ばないまでも対外交易による利権が存在する地だったことを示す。その利権に与れたのが越前守であったことは言うまでもない。

また、紫式部の夫、藤原宣孝は筑前守だった時期があり、太宰少貳を兼任していた時期もあった、という。河添は「宣孝が大宰府の地や、その官僚機構、そして交易事情に通じていたことは、『源氏物語』が創作されるにあたり、どれほど有利に働いたことか」と述べる（河添、二〇〇七、一〇四）。

そして宣孝は式部との結婚後の長保元（九九九）年十一月二十七日に、九州の宇佐八幡宮への勅使、宇佐の使に選ばれ、宇佐に赴いている。河添は同日の『権記』に宇佐八幡宮に奉幣する宣命には大宰府が言上した敵国の脅威のことが載っていたという、と述べる。具体的には長徳三（九九七）年、大宰府からの急ぎの使者が南蛮賊徒が肥前・肥後・薩摩で略奪したことを伝え、高麗人が来寇する噂が流れた。翌年二月には大宰府が高麗国人を追討し、九月には大宰府が貴駕嶋に下知して南蛮を捕まえることを言上し、翌年の長保元年九月には大宰府は南蛮賊を追討する旨を言上したという（河添、二〇〇七、一〇五―一〇六）。

河添は宣命の敵国の脅威がこれらの一連の出来事に関係があるのだろうし、宣孝も勅使としての役目をよく心得ていたことであろう、と述べる。この夫の宇佐下向の見聞もまた、式部に伝わった可能性を河添は述べる。

敵国の脅威の中には南蛮の賊徒による略奪事件、そして大宰府がキカイガシマこと貴駕嶋に南蛮を捕え進めるべきことを下知したと言上してきたことも含まれる。城久遺跡群を擁する当時の喜界島はⅠ期であり、やがて舶載容器群等がⅠ期の搬入遺物群を著しく凌駕した状態で出土する賑わいのⅡ期を迎えることになる。

紫式部の父の藤原為時が天皇に直訴してまで手に入れた越前守という役職、そして夫の役職はいずれも対外交易の利権が多分に絡む地にあった。そして都の貴族がどんなに高価でも入手したいと望む唐物を積む大宰府からの船が必ず通行するのは、播磨灘と明石海峡である。その明石を拠点とした明石の入道がいかなる方法で蓄財したかは、当時の上流貴族たちにとって暗黙の了解であり、式部もそのような事情を認識していたのではないか。

これは中世の瀬戸内海のことだが、海賊が自分達の生活領域を通行する船舶に近付き、物や財貨を通行料として徴収することが行われていた、という。これは一種の海賊の経済行為で、通行料をきちんと払えば危害を加えることはなかったが、支払いをしないと手ひどい目にあった、という。また、海賊の一員を、海賊の支配海域を通過する際に案内人として船に乗せる上乗りという慣習や、怪しい船に遭った時に見せるために海賊にその署名入りの過所旗を乞うこともあった、という（山内、二〇〇四、二二―二六）。

明石海峡付近の海域は潮待ちの港があり、そこに必ず船は停泊した。その船から通行料の名目で物や財貨を徴収すること、あるいは播磨灘や明石海峡の潮流を熟知した配下を通行する船に乗せて幾分かの礼物を徴収することなどは、記録の無い時代から行われていた可能性がある、と考える。

明石の入道は入胎夢という霊夢をみて、その実現に生涯を掛け、姿を消す。その姿は神秘的であり、彼が夢の実現に生きたあたり方は物語の中で特異な様相を呈する。しかし、明石の入道は夢を見るだけの人間ではない。前掲のように西別府は、摂津・山城・播磨などの水陸交通の要衝地域において海賊行為や群盗行為をなす者のなかには、先学が指摘するように王臣家と密接に関係した交易集団を想定することも可能であろう、と述べる。そのような勢力と一定

の距離を持ちつつ狎れあうことでも播磨守は十分に蓄財できたはずである。

『源氏物語』は物語であり歴史資料ではない。しかも平安時代の高位の人々の恋愛譚のみに焦点を絞った物語である。しかし、その中には紫式部が書き残す必要を感じなかった平安時代の現状が見え隠れする。明石の一族の物語にもまた、夢、神秘、信仰などの語りの奥に明石の入道の強かさや蓄財の腕前を垣間見せる。唐物を愛でた『源氏物語』の人々と明石の入道の蓄財、そして平安時代に大宰府を騒がした南蛮の賊徒、そしてキカイガシマの動向は遙かな海の道でつながっているのではないか。

おわりに

『おもろさうし』のおもろの「き、やの浮島」、「き、やの盛島」は従来から喜界島と見なされていた。小論では「き、やの焼島」が硫黄島である可能性を提示したが、それを証明することはできない。しかし、王府おもろに先立つ地方に割拠した男性支配者達のおもろには、彼らが積極的に海の彼方に乗り出し、富を集めることが謡われている。利権に敏かったであろう彼らがキカイガシマと呼ばれることもあった硫黄島の生む富のを知っていた可能性は十分にある、と考える。そして失われたおもろ群の中に硫黄島こと「き、やの焼島」と喜界島こと「き、やの浮島」を対句で謡ったおもろがあり、その一節が巻一―六に紛れ込んだ可能性を筆者は考える。

越州窯青磁は『源氏物語』や『宇津保物語』などの平安時代の物語に登場する。そして、亀井明徳は越州窯陶磁器の需要層を「寺院、官衙が多いが、とくに九州においては官人層の私物、および富豪層、換言すれば郡司以上の階層も需要層であり、しかも彼らは国内交易の荷い手である」と述べる（亀井、一九八六、八九）。また、亀井明徳は城久遺跡群の山田中西遺跡出土の越州窯青磁碗について精製品と粗製品の二種類があり、「遺構および他の遺物から推

定されているように官的な施設に保管されていた什器のひとつと考えるのが妥当であり、ここが内外交易の基地的な、あるいは市的な性格を付与するには量的に不十分である」と述べる（亀井、二〇〇六、九九―一〇〇）。

それでは越州窯青磁のあり方や、長徳四（九九八）年に大宰府から南蛮捕進命令を受けたキカイガシマ（喜界島）にある城久遺跡群は官衙なのか、というところを示す証拠はない。そして城久遺跡群の越州窯青磁が亀井の述べる九州の官人層や富豪層のような人々の私物か、というところもわからない。

平安時代、上流貴族は唐物を愛好し、手段を選ばず唐物を集めていた。『源氏物語』に書かれることのない、貴族や国衙の権威をかさにきた乱暴な人々が唐物を集めるのに一役買っていたことは、もっと知られて良い。また書き残された公的な交易よりも、書き残されることのない物流のほうが遙かに多かったこともっと認識されるべきである。『源氏物語』の秘色青磁、こと越州窯青磁や明石の入道や明石の君にまつわる唐物にもそのような眼差しを注ぐと、別の側面が見えてくる。

キカイガシマのキの当て字が貴から鬼へ変わっていくことはよく知られている。それが時間の流れの中で貴い唐物、こと高級舶載品の通り道であり、価値ある南方物産を産する島々が鬼のような賊の跋扈する島々になってしまった、という認識によるのか、というところは一面の事実だがすべてではない、と考える。貴重で高価な品々の周囲には鬼のような男性の暴力的な力を揮い、力づくで利権を引き寄せようとする人々が必ずやいるはずである。「貴」と「鬼」は貴重で高価な品々をめぐる人間達のせめぎ合いを象徴する文字である。

貴駕島ことキカイガシマに南蛮捕進命令が出され、やがて大宰府は南蛮賊を追討した旨を言上する（九九九年）。この年に紫式部の夫、藤原宣孝は宇佐八幡宮の勅使に選ばれている。南西諸島の海域の不穏な動きの後、城久遺跡群は最盛期を迎える。やがて城久遺跡群はその役割を終えて忘れ去られるのだが、近年の発掘成果で人々の耳目を集めることになる。

城久遺跡群のあった喜界島に越州窯青磁の優品が存在する。『源氏物語』に越州窯青磁ほかの唐物が登場するが、その背後には唐物の利権に与ったであろう文字資料に残らない人々の活動が垣間見られる。城久遺跡群について考察する際、亀井明德が述べる前掲の「大宰府官人あるいは管下の国司等が不正貿易によって利を得ていた例は枚挙にいとまがない」、そして瀬戸内海、九州、薩南諸島ほか日本の近海を跋扈して唐物ほか貴重で高価な文物を積む船を狙っていた文字資料に稀にしか残らない海賊のあり方に思いを致すと新たな展望が拓ける、と考える。

黙して語らない越州窯青磁は文字資料とは異なる次元で能弁である。越州窯青磁に導かれた小論は多くの課題を筆者自身に提示する。その課題の広がりには思いを致しつつ擲筆する。

【参考文献】

梶川信行「三山歌と住吉大社」『住吉大社事典』真弓常忠編、国書刊行会、二〇〇九年。

河添房江『源氏物語と東アジア世界』日本放送出版協会、二〇〇七年。

河添房江『光源氏が愛した王朝ブランド品』角川学芸出版、二〇〇八年。

河東 仁『源氏物語』における夢の役割「夢と物の怪の源氏物語」三田村雅子・河添房江編、翰林書房、二〇一〇年。

亀井明德『日本貿易陶磁史の研究』同朋舎出版、一九八六年。

亀井明德「南島における喜界島の歴史的的位置」『東アジアの古代文化 一二九号』大和書房、二〇〇六年。

京都国立博物館 <http://www.kyohaku.go.jp/syuzou/meihin/ouji/item06.html>

国史大辞典編纂委員会『国史大辞典』吉川弘文館。

佐藤和夫『海と水軍の日本史 上巻』原書房、一九九五年。

島村幸一「おもろさうし」選解第一『立正大学文学部研究紀要第三十号』、二〇一四年。

高梨 修「琉球史の南北」『琉球 交叉する歴史と文化』島村幸一編、勉誠出版、二〇一四年。

永山修一「文献から見るキカイガシマと城久遺跡群」『東アジアの古代文化 一三〇号』大和書房、二〇〇七年。

永山修一「文献から見たキカイガシマ」『古代中世の境界領域 キカイガシマの世界』池田榮史編、高志書院、二〇〇八年。

西別府元日「平安時代初期の瀬戸内海地域」『瀬戸内海地域における交流の展開』水野祐監修・松原弘宣編、名著出版一九九五年。

浜田泰子編『おもしろさうし対語索引』ロマン書房、一九八八年。

福 寛美『喜界島・鬼の海域』新典社、二〇〇八年。

外間守善校注『おもしろさうし上下』岩波書店、二〇〇〇年。

山内 譲『中世 瀬戸内海の旅人たち』吉川弘文館、二〇〇四年。

横井 孝『源氏物語の風景』武蔵野書院、二〇一三年。

吉成直樹『琉球の成立』南方新社、二〇一一年。